

文芸

俳句

巻貝の話弾んで雲狩り

池田 逸子

青田風蛙に巻き込む草刈機

伊藤 敬子

姫西瓜蔵ついで手が生む優し味

今関満喜子

青田原風の足あと風となる

魚地 照子

仙道の尽きて堂の閑探し

江森 悦子

父の日に子に連れられて昼の宴

大谷 武彦

臍押してメロン食べ頃嬰の声

川島 孝夫

海の家のかんに大きくかき氷

川島 通則

黒南風や軍船着きし尾垂浜

向後 寛

本流へ戻れぬ鯉や中干し期

越川せつ子

鈍色に解け合ふ沖や梅雨怒濤

越川 福子

あなたには采けぬ為にと夏帽子

小松 藤男

枝豆をつるり押し出す白磁皿

佐瀬 輝夫

見渡せば眩しすぎます夏の海

鈴木とし子

八月や忘れてならぬ昭和あり

鈴木 利子

雲の峰抜きんじろ堂の青さかな

玉虫 栗扇

夏の海赤銅色の乙女たち

土屋美枝子

道標に海岸の名や枇杷熟るる

土屋 義昭

時折の余震に慣れて端居かな

戸村 静草

一日を家ごと洗たく梅雨晴間

西崎さち子

短歌

気落ちせる我に友よりメールあり

「お花は今日も笑ってゐるよ」

カーテンの隙間を洩るる月明かり

こまよき娘よ切に逢ひたし

鋏・鎌につぎて大事な噴霧器が

充電せるも作動なさざり

鴨たちが栗山川に泳ぎぬて

人の気配にさつと飛び立つ

身の程を知りてゐるらし柿の木は

青き実多に落としぬるなり

大木羽広げ飛び交ふ鳶の群れ

湖畔の宿に飽かず眺めつ

はらはらと微かな風に木蓮の

花弁散るよ夕べの庭に

職場なる教室の見等にもみせしよ

佐渡路に鳥賊の立ち泳げるを

雨上がり坂の下なる集落と

墨絵の様に霧は包めり

夏の陽と街の騒音さへざりて

美術館内に靴音こだます

笥よりしたたり落つる水の輪は

夕つ光りを綾なし反す

節電に工夫の生る生活法

今更思う過去の傲りを

螢火や途切れ途切れの少年期

母につれられ手のぬくもりに

腰痛で整形外科で診てもらう

老齢と云われて言う言葉なし

何事もなかったように静まりて

雷雨のあとの空気がさわやか

新緑の椎の大樹は山中に

眩しき午後の光吸い込む

土屋 好

こうほう博物館 41

穴の開いた壺



この壺は、平成六年、篠本城山遺跡（篠本城跡）の発掘調査で、古墳の周りの溝から出土した、古墳時代の須恵器と呼ばれる器です。高さ十一センチほどの可愛らしい壺で、口がラッパのように開き、胴は少しつぶれた穂のようで、その胴の真ん中に穴が一つ開いています。また、ラッパのような口の部分には、櫛で描いたような波状の文様があり、一本の出っ張った線が廻っています。これはハソウと呼ばれる特殊な須恵器で、漢字では瓦と泉とを合わせた字を当てます。

この壺の色は黒っぽい灰色で、肩の部分には胡麻塩状の釉状のものがついています。これはこのハソウが、古墳時代中ごろに陶邑遺跡（今の大阪府堺市）で、朝鮮から伝わった技術によって、窯を使って高温で焼かれたためです。

胴に穴が開いているのは、この穴に細く短い竹の棒を差し込んで、注ぎ口にしたため

とされています。とするとこの壺の中にお酒でも入れて、徳利として酒を酌み交わしたと想像されるところですが、出たところが古墳、お墓であるためお酒を飲むには不謹慎であることは昔も変わらなかつたかもしれません。

これまでの研究では、このハソウは古墳時代の葬送儀礼の際、お墓あるいは死者をこの中のお神酒で浄めるためのみに作られ、使われた後、壊され捨てられたとされています。この城山遺跡で出土したハソウも、細かい破片となって散乱した状態で見つかり、その説を裏付ける結果と言えます。